

## 戦場の偶然性 —ヘミングウェイの戦争報道と最前線の平和哲学—

Contingency of Battlefield ;  
Hemingway's War Dispatches and Peace Philosophy at the Front Line

大藪 敏 宏  
OYABU Toshihiro

21世紀においても、「絶え間なく」戦争が続けられている。今もなお、そこでは兵士だけでなく一般市民も偶然的な死傷に巻き込まれる。現代の戦争における偶然的死傷の問題について現場に赴いて調査することには大きな困難と危険が伴う。しかし、20世紀アメリカ文学を代表する作家として有名なE.ヘミングウェイの戦争文学に比べて、最前線に従軍して打電し続けたその戦争報道はあまり知られていないし、研究されることも少ない。今もなお地上戦等における偶然的運命について独自かつ多くの情報を伝えるその署名記事群に注目し、戦場の偶然性について考察し、さらにその独自の平和哲学の萌芽に光を当てることによって、独創的哲学の多様性と後世への示唆を読みとる。

キーワード： コラテラル・ダメージ、正常性バイアス、多重人格、ハードボイルド

### 1. はじめに—「絶え間ない戦争」と戦争概念の偶然性—

戦争において生と死の分かれ目は紙一重で偶然性に満ちている（らしい…というのは戦場を知らないで平和を考察しようとするからである<sup>1</sup>、以下同様）。戦場において至る所に戦災死または戦死の偶然性は満ちていて、先ほどまで冗談を交わしていた友人（戦友）が直後の「砲撃」を受け今は隣で死体となっている<sup>2</sup>。彼が死んで自分が生き残ったという生死の分かれ目に何の必然性もなく、圧倒的な偶然性に委ねられている。こうした戦場の偶然性を直視した哲学の先行研究は見当たらず、この偶然性から何か新たな知見をもたらしたという話も聞かない。社会生活における儚い偶然性について例外的な網羅性をもって研究したヘーゲル哲学ですら<sup>3</sup>、戦場の偶然性も戦争の偶然性も取り上げなかった。

近代的な市民社会において地上戦が行われている現代のウクライナの戦場においても、以下のような戦場の偶然性に晒されており、地理的に遠く離れているからといって偶然的惨禍が目の前に落ちてくるまでは永遠の相によってそれを忘れようとした詩人のようなわけにはいかない<sup>4</sup>。

ウクライナ北東部スーミ州当局によると州都スーミの中心部で2023年7月3日、5階建てのアパートがロシア軍によるドローン（無人航空機）攻撃を受けて少なくとも住民3人が死亡しただけでなく、同州のロシア国境沿いの地域も同日、ロシア側から少なくとも5回の「砲撃」を受けたと報じられている<sup>5</sup>。

圧倒的に情報が少ない中でフリージャーナリストの玉本英子氏の報告によると1年前の2022年にロシア軍の「砲撃」で住民が逃げ出した南部ヘルソン近くの村で取材した偵察部隊の隊長も、2023年5月に転戦先の東部バフムトの戦場で自軍の兵士の遺体を収容中に「砲撃」を受けて亡くなったという<sup>6</sup>。

第二次世界大戦の日本では沖縄を除いては国内で地上戦をあまり経験していない影響か、その戦争文学において描かれるのは圧倒的に空襲や原爆投下によるものか南方の密林での地上戦であり、こうした都市への砲撃が行われる地上戦における民間人のコラテラル・ダメージ（二次的・付帯的死傷ないし偶然的損害）や兵士が体験する偶然性の情報は、日本においては外国に比べると比較的少ないかもしれない。英語で“collateral casualties”（付帯的犠牲者？）と言えば、民間人死傷者を指してしまう。しかし、日本でも沖縄など地上戦が行われた場所では戦闘に「付帯的」(1) 偶然的に巻き込まれた民間人死傷者は少なくなかったはずであるが、詳らかではない。これはどうしてであろうか？立ち止まって考える必要がある。第二次世界大戦当時の日本では敵軍が上陸してきたら、民間人も逃げるな、投降するな、竹槍で突撃せよと訓練されていたと歴史の教科書にある。つまり、日本の民間人は「一億総玉砕」の名のもとに、敵軍が上陸してきたら「本土決戦」において民間人も決死、つまり必然的戦死を義務付けられていたのであり、それは民間人が偶然に付帯的に戦闘に巻き込まれた英語で言う“collateral casualties”つまり偶然的犠牲者というカテゴリーではなかったのである<sup>7</sup>。つまり、戦争の概念が日米ではまったく違っていたというのが、この戦争の本質であったと言ってもいいことになる。とすれば、さらに戦争概念そのものの偶然性が成立することになる(1)。よく考えれば、その背景にあるのは国際法の偶然性でもある。

この概念の偶然性にとまって、実は日本では前線の兵士の戦死と民間人の戦災死との境界も不確実で偶然的なものになったとも考えられる。そうであるなら英霊の区別も勲章の等級も偶然的になる。特に後者については、E.ヘミングウェイは当初から懐疑的であった<sup>8</sup>。

（平和を求めて一必ずしも当初からではないにしても）都市の地上戦の「実相」を直視しようと努力した作家が、ヘミングウェイであった<sup>9</sup>。十歳代であった第一次世界大戦からスペイン内戦を経て四十歳代の第二次世界大戦まで様々な形で従軍して戦場の「現場主義」を貫こうとして満身創痍を甘受した、しかし著名な作家である。ゆえにおよそ1世紀前の戦場であるが、市街戦を含む都市的社會における地上戦の「実相」と偶然性がどのようなものであるかについて戦場から離れてなお関心を向けるとき、ヘミングウェイの戦争報道記事とそれから発展した戦争文学は、得難い希少な情報と資料を提供してくれる。戦争の「実相」に迫ろうとしたヘミングウェイは、必ずしも中立客観的な報道であることを標榜することなく、むしろ当初より明確に「共和国軍」や「国際旅団」もしくは「連合軍」もしくは「米軍」の側に立って従軍しているのであるが、明確な軍部や軍人の立場に立つわけではないということもあり、そのような立場がしばしば戦場における「偶然性」もしくは意図しない不都合や敗戦の事実を隠蔽する必然性や強制（いわゆる

「大本営発表」も必ずしもなかったこともあり、また究極的には作家として「人間」の「実相」に迫ることを目指していたためか、残されたそのテキストには戦争の偶然性が多様かつ克明に記録されている。しかしこの戦争の偶然性が多面的に描かれたという特徴は、従来のヘミングウェイ作品に関する文学的研究ではあまり注目されてこなかった<sup>10</sup>。またその際、「人間」の「実相」に迫ると言っても、必ずしも目下の流行の（アトム的）「個人」（のリベラリズム）に終始することはなかったという点で、かと言ってまたその共同体としての「共和国」を信じきることもできなかったリアリズムゆえに陥ったロスト・ジェネレーションの先駆的作家になった点でも、独自であった。つまり後世のリベラル・コミュニタリアン論争などが太刀打ちできる文学ではなかったのである。

目下のウクライナ等の戦時下において両当事国の発表にどの程度まで信憑性を期待できるかは<sup>11</sup>、大日本帝国の「大本営発表」を参照するまでもなく、明らかに不確実不透明である。そうした状況下で、戦争をめぐる偶然性とコンティジェンシーに関心を持続する条件が揃っていないとは言え、なお今の地上戦の戦禍（偶然性）に晒された人々の運命（偶然的必然性）を忘れないように関心を向け続けようと努力するならば<sup>12</sup>、残されたヘミングウェイの希少な資料と情報を手がかりに地上戦と市街戦の戦場の偶然に満ちた「実相」に迫る試みに取り組むことができる。

既にヘミングウェイの約百年前からの戦争報道が、「ヨーロッパは絶え間なく戦争を続けてきた」と指摘していたことを見れば<sup>13</sup>、今日の戦争のグローバルな展開は、この約百年以上前からのヨーロッパの絶え間ない戦争のグローバル化または巻き添え—ヘミングウェイはこれをヨーロッパによるアメリカの「啜りしゃぶり(sucked)」と表現した—にほかならないという視点も可能になる<sup>14</sup>。

## 2. 都市砲撃による市民の死の偶然性

都市市街地の（空襲や原爆投下とは異なる）地上戦における「砲撃」に関して、ヘミングウェイは北米新聞連盟 NANA(North American News Alliances)の契約特派員記者として、1世紀近く前のスペイン内戦における「マドリード砲撃」について、次のように報じた。—「日曜の人出ですべての通りがいっぱいになっていた町中で、砲弾はまず、電気がショートしたときの突然のフラッシュとなり、次いで花崗岩の砂ぼこりが轟音をたてた。その朝、二十二発の砲弾がマドリードを襲った。市場から家に帰る老婆がひとり、この砲撃で殺された。砲弾は彼女を殴り倒して黒い服を丸めたただの固まりに変え、片方の脚は突然に引き千切られて隣の家の壁の方へぐるぐる回転しながら吹き飛ばされた。他の街区では、砲撃で三人が殺された。彼等は、155 ミリ砲弾の破片が歩道の縁石で破裂したとき、埃と瓦礫にうもれた古着の破れたたくさんの束のようになって横たわっていた。通りを走ってきた一台のクルマが突然止ると、明るい閃光と轟音の後で急にそれた。その運転手がよろめき出てくると、その頭皮が垂れ下がって目に重なり、手で顔を覆って歩道に座り込んだ。血が顎のあたりまで流れて滑らかな光沢となった」<sup>15</sup>—。

このヘミングウェイの署名記事（「マドリード砲撃」NANA 通信 1937年4月11日）は、必ずしもそのすべての瞬間を自分自身が目撃していたという保証はないにしても、彼による迅速な現場取材と目撃情報の収集によって可能になったと考えてよいであろう。この約百年前の報道の描

写は都市部における地上戦の報道記事という点で第二次世界大戦で日本が経験した空襲を中心とした記録とは重ならないが、2022年2月からのウクライナで頻繁に起きている「砲撃」を彷彿とさせ、その「実相」に関心をもち理解しようとする限り、参考に足るものである。なぜならば、現代のデジタル動画の時代においてはせいぜいその瞬間の「遠景」が映し出されるだけなのも近景からの遺体の克明な映像は直視に堪えないからである<sup>16</sup>。しかしながらその半面で、上記のヘミングウェイのような文字言語による具体的な報道も見る機会が今は減少しているように思われる。ヘミングウェイは決して不偏不党の中立客観的な立場を標榜せず、他の人間ではなく無辜の老婆と3人が死ななければならなかったことに必然的な罪も罰もなかった死の偶然性を浮き彫りにしつつ、この都市「砲撃」による都市民の戦場における死の偶然性について、以上のように冷徹に描写した。そのうえでヘミングウェイは、「日曜の賑わいを狙って街路を砲撃したのは軍事的〔に正当〕とはいえない」と明記している<sup>17</sup>。攻撃側の必然性つまり「大義名分(legitimate)」を考慮した上でこの言及は、百年近い歳月を経た21世紀の今日でも、都市や農村への「砲撃」がもたらす一般市民の戦災死の偶然性(collateral damage)に対して十分に通用する。

異なるとすれば、今日のウクライナにおいては東部ドネツク州で2023年7月24日夜にロシア軍が同州コスチャンティニウカをクラスター弾で「砲撃」し、子ども2人を含む3人が死亡したと、キリレンコ同州知事がSNS投稿で発表した点である<sup>18</sup>。クラスター弾やドローンやSNS投稿といった技術革新が異なることは言える。ヘミングウェイのスペイン内戦報道から約百年弱の時間経過の間に、軍事技術と情報技術の進歩以外に人類は何の進歩も本質的にしていないとも言える。逆に戦場における死の偶然性について研究する上では、ヘミングウェイの報道は資料として今もなお通用する結果となっている。

市民が生活する都市への地上戦がもたらす死の偶然性は、百年一日のように今も停滞したままである。

### 3. 身辺雑事と市民生活に迫る最前線の偶然性

このヘミングウェイの署名記事「マドリード砲撃」(NANA通信1937年4月11日)は、1936年から1939年まで続いたスペイン内戦における「カサ・デ・カンポの闘い」を報じる<sup>19</sup>。この記事の冒頭は、「マドリード発一二キロ離れた前線では、松の木が点在する緑の丘の中腹の反対側から、騒音が重い咳こむような不満の声となって響いてきた」という描写から始まる<sup>20</sup>。それから2年後、この内戦も末期の敗戦が濃くなった1939年の「エスクワイア」2月号に掲載された短編小説「戦いの前夜」では1937年4月にヘミングウェイが制作に関わった映画『スペインの大地』の撮影のためのカメラの設置場所の適否について、「松の木が点在する丘、湖、そして、石造りの農家の建物が高性能砲に直撃されて石埃の中に消えてゆく様子を撮るためには、遠すぎはしなかった」と描写している<sup>21</sup>。この小説ではその日の撮影終了後にホテル・フロリダに戻った後に、バー・チコーテに行ってニューオリンズの旧友と遭遇して当日の「カサ・デ・カンポの闘い」の惨敗に憤激して絶望的な悪態を延々とつかれる様子が描かれている。この1937年は3月21日からヘミングウェイはホテル・フロリダに滞在して後に三人目の妻になるマーサ・ゲルホーンと親密化している。こうしたことから4月11日付署名記事の「咳こむような」砲声が聞こえる「マ

ドリード発一キロ先の前線」である「松の木が点在する緑の丘の中腹」というのが「カサ・デ・カンボ」の緑の丘であることが分かる。つまり、スペインの首都マドリードの中心部にあるホテル・フロリダから約 2 キロつまり徒歩 30 分ほどの距離に、政府軍と反乱軍とが戦闘を繰り広げる最前線があったのである。首都や大都市での近代的地上戦をあまり経験したことのない国民からは想像のつかない地上戦の偶然性がある。最前線の激戦地から徒歩 30 分の距離でホテルやバーの市民生活が接しているのである。

それからわずか三日後の署名記事「新しい型の戦争」(NANA 通信 1937 年 4 月 14 日)は、平和な市民生活と地獄の戦場が紙一重で隣接する首都マドリードのこの市街戦における死の偶然性について、ヘミングウェイは克明に戦場報告している。「身辺雑事ではなく戦況を送れと言う北米新聞連盟からの要請に応じて書かれた記事」という性格ももちながら<sup>22</sup>、にもかかわらず、ヘミングウェイはその「要請」を半ば無視するかのように「身辺雑事」を書き続ける。それはなぜかという、市民が暮らす都市で地上戦が行われるということは市民の「身辺雑事」の真っ直中に砲弾が飛んできて一般市民が戦争に巻き込まれ死ぬという戦場の死の偶然性が都市生活の真っ直中に発生するからである。これが、スペイン内戦から遠く離れた安全で平和なところにいる「北米新聞連盟(North American News Alliances)」の「司令部」には前線の通信員の「実情」が分からないという平和な司令部と危険な前線の戦場の通信員との間に生じる相互理解の壁または偶然性である<sup>23</sup>。だからヘミングウェイは現場主義の実情に徹して、連盟「司令部」からの要請や命令を半ば無視する—このヘミングウェイの現場主義の体験が、やがて後に逆に軍「司令部」の「戦略」の偶然性を告発する戦争文学「戦闘の前夜」や「分水嶺の下」に結実する<sup>24</sup>—。

#### 4. 戦場のオノマトペと窓の下の死の偶然性

都市の市民生活の「身辺雑事」の直中で紙一重で隣接する戦場の死の偶然性を、ヘミングウェイの戦争報道は、ホテルのベッドの中の暢気なまどろみから子ども向けの絵本の中かと思うようなオノマトペとともに銃撃戦を描き出す。—「マドリード発—ホテルの窓は開いていて、ベッドの中に横になっていると、17 ブロック離れた前線で発砲されているのが聞こえる。小銃の発砲は一晩中続く。小銃の音がタクロン・カポン・クラーン・タクロンと鳴り、やがて機関銃の音が始まる。機関銃は小銃より口径が大きいので銃声も大きく、ロン・カラロン・ロン・ロンと聞こえてくる。それから飛来する迫撃砲の轟きが始まり、機関銃の連続射撃が続く」<sup>25</sup>—。まるで宮沢賢治の童話のような生き生きとした軽やかなオノマトペから戦争報道は始まる(なぜか?それが問題なのだ—戦争と平和の中の戦場の死の偶然性を剔抉するためである—だから北米新聞連盟の「司令部」は「身辺雑事」を書くことの意味を理解できない—ここに戦場の死の偶然性の哲学の存在理由がある—)。

だからヘミングウェイは暢気に記事が続ける—「寝ながらそれを聞いていて、ベッドの中で足を伸ばして、ベッドの冷たい足元の方をだんだんと暖めているということは、ユニヴァーシティ・シティやカラバンチュルではない所にいることはありがたいこと(great thing)だ」—。ユニヴァーシティ・シティとは直前の 4 月 11 日付「マドリード砲撃」の記事によれば、前年の 11 月に首都マドリード市内に侵入したファシスト反乱軍に反撃する共和国政府軍の「既に三日間におよぶ

戦闘」が見られた病院があるところであり、反乱軍の「最突出部」と戦う激戦地を指す。だから、その最前線の激戦地にいるのではないのは、「ありがたいこと (great thing)」というのは当然である。ましてや夜具の中にマーサ・ゲルホーンも一緒であれば、なおさらである。しかし性と生のすぐそばに戦場の死がある、だから、ホテルの窓の下の街路で通行人が歌を歌ったり酔っ払いが喧嘩をしていたりという「身辺雑事」を書くことと戦争報道とは市街戦においては表裏一体なのだ。しかしだから、朝のまどろみは高性能爆弾が着弾した轟音で叩き起こされ、驚いて窓から見ると市民が必死に逃げている。記者ヘミングウェイがバスローブのままで大理石の階段を駆け下りると、突き当たりそうになった中年の女性の胸の下で組み合わせた手の指の間からは血が噴き出している。18メートルほど先の街角では服が引き裂かれ埃だらけになった死体が瓦礫の中に見える。死体には、頭がない。

しかし、NANA 通信のヘミングウェイによるこの 1937 年 4 月 14 日付の署名記事ののどこにも聞こえるオノマトペによる戦場の描写は、今日のウクライナの戦場における紙一重の生死の偶然性と驚くほど近い。

2023 年 7 月 6 日未明、ウクライナ西部リビウ、ユーラ・トロプチェンさん (19) はヒューツという「誰かが大きな口笛を吹くような」音を聞いたという。自宅から 3 ブロック離れた先にミサイル攻撃があり、10 人が死亡した。「死んでいたのは、私だったかもしれない」と声を絞り出し、少し「ミサイルがずれていたら。生死は紙一重だと実感した」という<sup>26</sup>。

## 5. 偶然的死と「戦争に特有」の正常性バイアス

スペイン内戦についての 1937 年のヘミングウェイの戦争報道は、2023 年の戦場を理解するのに今もなお示唆的である。1937 年のヘミングウェイは、次のように伝えていた。

戦闘の翌朝の空腹で迎えた朝食をとるホテルの食堂では、誰かが「あれを見たかい？」と尋ねる。「見たとも」と答えると、「あそこは俺たちが一日に何回も通るところだ。ちょうどあの角じゃないか」。そして誰もが「俺じゃなかったろ？俺じゃなかったんだ」と自分に言い聞かせて、安心する。これを、ヘミングウェイは、誰もが抱く「戦争に特有の気持ち(the feeling that characterizes war)」と書いている<sup>27</sup>。今の心理学者なら、「正常性バイアス」の欺瞞と規定するかもしれない。しかしヘミングウェイにとっては、それは欺瞞ではなく戦争の「実相」への入り口である。

都市の戦場では、夜になると「上等なホテルでシーツを敷いたベッドで寝る、正面の最上の部屋は 1 日 1 ドル。裏の、つまり砲撃から離れた側のもっと狭い部屋は、もっとかなり高くつくようになった。ホテルの正面の歩道で砲弾が爆発した後は、それまで泊まっていた部屋の 2 倍の広さの、立派な 2 間続きの角部屋は 1 ドル以下で泊まれるようになった」<sup>28</sup>。ホテル・フロリダの話だろう。あたかも何もかも昨年までと同じであるかのように上等なベッドに寝ながら、考えるのが戦闘の前線側とその反対側の部屋の宿泊料の相場の変化だ、「身辺雑事」である。そのような「正常性バイアス」のストレスの中で考えるのは、「奴らが殺したのは俺じゃない。そうだろう？そうだとも。俺じゃない。ともかく俺じゃない」<sup>29</sup>。この「正常性バイアス」の中で浮上するのは、戦場における生死の偶然性であり、その偶然性の「悲劇」である。

この生死の偶然性の「悲劇」がもたらすいわゆる「正常性バイアス」の延長線上の少し先に待っているのが「解離」であり、いわゆる「解離性同一性障害」つまり多重人格であり、この人格の同一性の分裂の探求は、現代の科学哲学者 I.ハッキングによれば、ヘーゲルによって着手されたものである<sup>30</sup>。カント哲学において人格の同一性の分裂は定言命法のもとで問題にならなかったが、もともとは共有されていたはずの同一の人格的共同体が、ヘーゲル哲学においてはたとえばクレオンとアンチゴネーの二つの人格へと分裂する局面で相互承認と和解が探求されながら失敗するという問題領域が精神概念を産み出していった<sup>31</sup>。戦場の偶然性は、こうした全面的な戦いに特有の自己意識の同一性をめぐる偶然と失敗の共同的歴史と関連しながら、やがてフロイトの「戦争後遺症」をめぐるトラウマ（心的外傷）の研究とともに精神分析学を産み出していく<sup>32</sup>。

## 6. 「戦時利得」のための戦場の偶然性から限定平和哲学への展開

一瞬前まで暖かいベッドの中で温もり、一瞬前までホテルの食堂で朝食を摂っていたのが、一瞬後には1ブロック先に砲弾が飛んで来て市民が死に、という市街戦の様相が接近する地上戦においては誰もが一瞬先は闇で一瞬先の偶然の死を、とりあえずはさっきの死は「俺じゃなかった」と自分に言い聞かせる。その日常の「身辺雑事」が前線の戦場の死に直面している嘘のような市街戦の実相が、後方の米国本国の人々や北米新聞連盟「司令部」にはどうしても伝わらない—この状況の偶然性の構造を説明しようとして S.ジジエクは、2001年9月11日 NY 同時多発テロの時に「現実の砂漠へ、ようこそ」と J. ラカンの現実概念を引用しながら解説した<sup>33</sup>—。

こうした前線と後方との間にある不確実性または偶然性は、戦場においてはいたるところにある。この偶然性にヘミングウェイはこだわり続け、何度でも立ち返り、後方司令部の無能に憤る前線の兵士の側に立ち続ける。

南原繁が戦後に出版する『歌集 形相』（岩波文庫）に収められた短歌は昭和11年からの歌であるが、それ以前のごく初期の短歌が富山で2016年に発見された<sup>34</sup>。その短歌で南原繁が当時のイ・エ戦争について「イ・エ・開戦 なだれいる イタリア軍の 暴戾 [ボウルイ] の 力はどまむ 他尔国の奈きか うち落す 爆弾(たま)は碎けて たわや奈る おみ奈も子らも あまた死にしとふ」（片口安太郎宛南原繁書簡 1935年10月13日消印より）と嘆いていた頃<sup>35</sup>、10歳年下のヘミングウェイは『エスクワイア』の1935年9月号ならびに1936年1月号で、この戦争について詳細な軍事的分析を行っている。しかし、その特徴と独自性は、後方司令部の高い所から戦場を抽象的に見下ろす鳥瞰図的視点ではなく、前線の兵士の現場の側に立つ「鳥類学的」視点に立つものである。

この点でヘミングウェイの視点は一貫している。だから、第一次エチオピア戦争について「そもそも1万4千の軍隊を、なんであれとにかく10万の兵と対決させないようにするのが兵法の要諦(essence of war)なのだ」とヘミングウェイが軍事の専門家として書いたからといって<sup>36</sup>、これを単なる数字上の合理性のみと理解してはならない。具体的にそこで戦死に追い込まれる兵士の立場で考えているのである。

たしかにイタリアやフランスやドイツなどヨーロッパ列強のそれぞれの立場を詳細に分析した上で、これらの列強諸国がイタリアのエチオピア侵略戦争（つまり「イ・エ戦争」）によってイタ

リアだけでなくそれぞれに国益を得られる事情をヘミングウェイは明らかにしている。しかし、それはアメリカの『エスクワイア』誌の読者に戦争への賛意と加担を勧めるためではなかった。逆にヨーロッパ諸国のこうした国益による戦争への誘惑から、やがてアメリカに対してもヨーロッパの戦争への加担の誘いが来るであろうことを予想して、その戦争への誘いにアメリカ国民が乗ることに反対するためである。いわく、—「戦争というものは、過去はいざ知らず現在ではもはや、単純に分析される経済的力によって引き起こされるものではない。戦争は今や個々の人間、デマゴーグや独裁者が、自分たちが誇示したどの改革政策も自分たちの失政の犠牲となった人民を満足させられないとなったときに、人民の愛国心に乗じて(on the patriotism of their people)戦争という大きな欺瞞(the great fallacy of war)へとミスリードして信じ込ませて演じ興行し、あるいは計画される」<sup>37</sup>—。

つまり戦争は遠くから「遠景」として見ていると美しく見えて、国益にもなり、自分だけは戦争で死ぬことはないと思込んだ人間によって始められるものだと、ヘミングウェイは明らかにする。だから「遠景」からだけ見て勘違いしてはいけない、だから戦争に加担するなど言いたいのである。だから戦場での偶然的な死の凄惨さに肉薄するために、ヘミングウェイは自分自身が戦場の現場で見てきた兵士の偶然的死の実相を近景のクローズアップで描き出すのである。—「昔は、自分の国のために死ぬのは甘美であり、ふさわしいことだと本に書いてあったものだ。しかし近代戦においては君が死ぬことに、なんの甘美さもふさわしさもありはしない。正当な理由もなく犬のように死ぬだけだ(die like a dog for no good reason)。頭を撃たれば素早く小綺麗に死ぬだろうし、止まらない、目が眩むような白い閃光を別にすれば甘美にふさわしく死ぬことさえできるだろう。ただ額の骨や視神経が粉々にされたり、顎が消えたり、鼻や頬骨がなくなった場合は、違ってくる。まだ考えることができるが、話そうにも顔がないのだ。…(中略)…さもなければ高性能爆薬入り砲弾が堅い道路に当って閃光が走って潰すような金属音が鳴ったと思ったら、両脚が膝の上から、あるいは膝のすぐ下から、または片方の脚がなくなって、ゲートルを突き破って白い骨が突き出しているのが見えたり、あるいは中で自分の足が粥のようにどろどろになっている靴を脱がしてくれるのを見たり、腕がボトリと落ちたのを感じて骨がなくなる感覚を学び、あるいは焼かれて窒息し嘔吐し、いろいろなやり方で地獄の底まで吹き飛ばされたり、いずれにしても甘美さもふさわしさもない。こうした恐怖のカタログをどんなに沢山並べて見せても、人がそれで戦争を思いとどまったためしがない。戦争が始まる前は、死ぬのは自分ではないと君はいつも思っている。でもいいか、兄弟、戦争に長く行ったら、死ぬのは君だ。

戦争という殺人行為と闘う唯一の方法は、それを作り上げる汚らしい組み合わせ、それを望む犯罪人や豚ども(criminals and swine)、奴らがそれを手に入るとそれを実行するばかげたやり方を明示して、正直な人なら詐欺を信じないのと同様に戦争も信じないように、戦争体制の下に奴隷化されるのを拒むようにすることだ」<sup>38</sup>—。

そう、後方の安全な銃後にあつて戦争の果実と「国益」とやらの甘い汁を望む「犯罪人や豚ども」<sup>39</sup>、それは後方の司令部とその更に後方にいる政治家や「売春婦」達だ<sup>40</sup>。

ここには「遠景」から戦場を(浪漫派の影響下で)美しく眺めるだけでなく、前線の不合理な偶然性をすぐそばの近景からクローズアップで捉えることによる、戦争反対への強い意志が感じられる。ここでヘミングウェイが着目している分水嶺は、自ら自発的に戦場に身を置いて死の危

険に身を晒す士官や志願兵と、強制的に武器を持たされて前線に送り込まれて戦場の偶然的な死に晒される兵士たちとの区別である。だから、好んで戦争に赴きそれを理解している自覚的な司令官や将校が戦争で死ぬ場合は、戦争にも弁明の余地があるとヘミングウェイは書いた。しかしそうした自発的な戦争のエリートは最初の数カ月で戦死していなくなり、そのあと前線に行かされるのは武器を持たされた「奴隷」で、戦列から離脱しようものなら憲兵や将校に銃殺されるから戦場から逃げられない兵士たちだけだ。

だから先の引用箇所が続いてヘミングウェイは、好んで戦争に赴きそれを理解している自覚的な将校が戦争で死ぬ場合の死には、その死の偶然性は問題にならず、あえて必然的死と言う論理的可能性に言及する。そして最初の数カ月で死ななかつた戦争のエリートは、その後は後方の「司令部」にいる司令官たちだけである<sup>41</sup>。そして彼らは後方の安全なところで戦争の果実だけを受け取りながら、前線の兵士たちに突撃命令を出しているだけでよい。つまり彼等には戦場の死の偶然性はない。しかし、好まずして戦場に向かわされた前線の兵士達が生き残れるかどうかは、悪魔のような戦場の死の偶然性にかかっている。たまたま偶然に砲弾や弾丸が自分から逸れたか、たまたま偶然に司令部の作戦が功を奏した場合だけである。

だからヘミングウェイの総力戦論は、次のような結論に至る。その結論の理解も、それがいつも末端の兵士の生命が晒される偶然性に着目していることを念頭に置くかどうかにかかっている。—「近代戦には、勝者はない。誰もが敗けて消滅してしまうような限界まで戦われるからである。末端で戦っている軍隊は勝つことができないと決まっている。どの政府が最初に腐敗するか、それともどちらの側が新しい連合軍を引き入れて無傷の部隊を新たに獲得できるかというだけの問いにすぎない」<sup>42</sup>—

これはアメリカがヨーロッパの戦争に引き込まれる前の戦間期に、次の戦争加担を回避するように米国民に対して呼びかけた雑誌記事である。勝つ戦争はいい戦争だが、負ける戦争は悪い戦争だというようなマッチョの粗雑な戦争観は、彼にはない。むしろ前線で死ぬ兵士がいる以上、ヘミングウェイにとって「勝利」はないのである。だから彼は続けて次のように結論づける。—「近代戦においては勝利はない。連合軍は大戦に勝ったが、勝利の行進を行った連隊は、実際に戦争を戦った男たちではない。戦争を戦った男たちは死んだ。700 万以上の人々が死んだが、元ドイツ軍伍長、元飛行士、個人的・軍事的野心に酔って、正体不明の霧のような愛国主義の血にまみれた陰気な元モルヒネ中毒患者が今日ヒステリックに期待しているのは、さらに 700 万人以上の殺人なのだ。ヒトラーはできるだけ早いヨーロッパでの戦争を望んでいる。彼は元伍長だが今度の戦争では自分で戦う必要はない。スピーチだけで済む。戦争をして彼自身が失うものは何もなく (nothing to lose)、得るものばかり (everything to gain) だ」<sup>43</sup>—

ヨーロッパは絶えず戦争をしてきたのであり、その中間の平和はヨーロッパの休戦にすぎなかった。だから第一次大戦ではヨーロッパの戦争にアメリカは愚かにも巻き込まれたが、二度とヨーロッパにだまされてはならない。これがヘミングウェイの結論であるが、その背景にあるのは以上のような前線の近景の兵士の大量の偶然的死傷であり、遠い後方の司令部の指導部やさらに後方の政治家達の必然的な戦時利得への冷静な分析であり、この分析が「近代戦では勝利はない」というヘミングウェイの反戦平和哲学を支えている。それは兵士の平和哲学であって、浪漫派の天下国家の美学ではない。

## 7. 鳥類学的戦場分析による兵士の平和哲学

しかもヘミングウェイの反戦平和哲学は冷徹な兵学によって支えられているところが、戦争は無規定・無限定に悪いという抽象的な平和論とは異なるところである。「鳥類学的通信」という副題が付された「翼はいつもアフリカの上に」という『エスクワイア』1936年1月号の署名寄稿では、イ・エ戦争のエチオピアの戦場で負傷した場合には、すぐに寝返りを打って腹ばいになれと(イタリア人)負傷兵に忠告するところから始まる。なぜなら、そうしないとアフリカの戦場においては血に飢えた上空のハゲタカが血を啜りに群がって来るからである。これはアフリカの戦場を近景で知っている者の視点である—当時イ・エ戦争を嘆く短歌を富山県小杉の片口安太郎に送った南原繁は、このようなアフリカの戦場の現場を知る由も分析する術もなかった。一さすがは18歳で傷病兵搬送要員となるべくアメリカ赤十字社に登録して第一次世界大戦のイタリア戦線で迫撃砲弾を受けて脚部に重症を負った経歴をもつヘミングウェイならではの視点である。この現場感覚が浪漫派的な文学者や哲学者には欠ける。

その上でイ・エ戦争の帰趨を占うのだが、そのときのヘミングウェイの分析のポイントは現実的な兵站線(食料・弾薬・物資の補給線)に焦点を合わせてオペレーションをリサーチするという現実的兵学である。エチオピア兵は戦場のエチオピアに住んでいて一日一食しか食わない。一日二食以上のイタリア兵のエチオピアにない食糧をイタリア等から補給するには長大な兵站線を維持しなければならない。緒戦でエチオピア軍が負けても広大なアフリカ大陸を奥深く退却すればイタリア軍はそれを追ってさらに長くなった兵站線を維持しながら戦い続けられなければ、イタリア軍が敗北する可能性がある」と指摘している—なおPM紙1941年6月9日「ラルフ・インガーソルとの会見—対日戦争は不可避か。ヘミングウェイの極東旅行記」において日中戦争における兵站線維持の重要性を指摘しているが<sup>44</sup>、この指摘は的中したと言え、ヘミングウェイの軍事専門家としての分析は兵站を軽視した当時の大日本帝国軍部の見通しを凌駕する水準であったとも言える—。

イ・エ戦争に対してこうした兵法の基本をおさえた専門的軍事的分析を加えたうえで、ハゲタカが負傷兵の血を啜ろうと狙うエチオピアの戦場の兵士たちにヘミングウェイが助言するのは、負傷したらすぐに俯せになれというだけではない。この寄稿の最後は、やはり先の「近代戦では勝利はない」の前線の兵士への前線の後方の司令部のそのまたはるか後方にいる政治家にだまされるなという助言と同じである。先の場合はヒトラーであったが、イタリア軍の兵士への助言の場合の最後方政治家司令官はムッソリーニになる。すなわち—「ムッソリーニの息子たちは、彼等を撃墜する敵機がない所で空軍勤務をしている。しかしイタリア全土の貧乏人の息子たちは歩兵である。世界中の貧乏人の息子たちが歩兵であるのと同様に。そして私としては、歩兵諸君の幸運を祈る。しかし私の望みは、彼らの本当の敵が誰であり、そしてどうしてそうなのか、その理由を彼らが理解できたらいいのに、ということに尽きる。」<sup>45</sup>—。

それは前線の兵士が晒される、時として血に飢えたアフリカのハゲタカの鳥類学的助言にあるように負傷したらすぐに俯せにならないとハゲタカに襲われるというほどの戦場の死の偶然性と、後方の司令部またはその遙か後方の安全地帯で戦時利得を独占しようとする真の「彼らの敵」と

の間にある、あまりに大きな死の偶然性またはその差に着目したヘミングウェイの平和哲学である。ただ、平和哲学と言っても無規定に戦争一般を抽象的に否定する無限定な平和哲学ではないのは、以上から明らかである。

さらに、相手がファシスト国家のドイツであれイタリアであれ、後方の戦時利得者から前線のドイツ兵とイタリア兵を分けて、前線の兵士が後方の銃後の戦時利得者の利益の犠牲になることに反対するという兵士の立場からの平和哲学であって、敵国であるか自国や友軍であるかの通説的な敵味方の論理を越えていく平和哲学である<sup>46</sup>。最前線の兵士と市民の視点に立つ限り、「戦争がもたらす善など何もない」（「権力の病毒」）と<sup>47</sup>、ヘミングウェイは（男性）誌「エスクワイア」1935年11月号でアメリカの（男性）読者と有権者に訴えていたことは銘記されてよい。

## 8. 「史上最大の作戦」の偶然性と「戦場の霧（独: Nebel des Krieges、英: fog of war）」

1944年6月6日のノルマンジー上陸作戦の記録映像は、テレビの特集番組などで何度か見たことがあるという人も少なくないと思われる。その映像はそのつどの今日的視点から回顧するという番組の文脈から編集され紹介されていて、広大な海岸線に約17万人という連合軍の兵士たちが乗りつけた上陸用舟艇からあたかも整然と上陸していく様子が映像で紹介されることが多い。—「第一波攻撃だけでも、アメリカ、イギリス、カナダの将兵17万6000人、各種艦艇5300隻、戦闘機・爆撃機・輸送機1万4000機というすさまじさで、物資揚陸用の人工港まで曳航して、「史上最大の作戦」といわれた。最高司令官にはアメリカのアイゼンハワー、地上軍の総司令官にはイギリスのモンゴメリーがあたった。上陸地点は、コタンタン半島（ノルマンディー半島）からオルヌ河口までの約100キロメートルの海岸。ドイツ側は、上陸地点の予測を誤ったこともあり、西部方面軍総司令官ルントシュテット、B軍集団司令官ロンメルらの戦闘指揮にもかかわらず、物量に圧倒的に優勢な連合軍の攻勢に屈し、約90日でパリをはじめフランスのほぼ全土を連合軍の手に明け渡す結果となった。[藤村瞬一]」（日本大百科全書「ノルマンディー上陸作戦」）—

他の資料を見ても、「オマハ・ビーチ」等の一部を別にすれば上陸作戦は損害も想定外に少なく円滑に進んだ結果、8月にはパリがナチスから解放されたとされる。

この上陸作戦を前線の海上から実際に見ていたE.ヘミングウェイによる署名記事を読むと、大混乱の中で上陸用舟艇のLCV(P)(車両・兵員上陸用舟艇)やLCI(歩兵上陸用舟艇)の歩兵たちは、被弾と死傷の大混乱の中で海岸に上陸していったと描かれている。100キロメートルとも伝えられる広大な上陸地点。約17万人もの兵が上陸するとなれば、当然各部隊ごとに上陸地点が細かく具体的に割り振られなければ長大な海岸で上陸する兵力の疎と密とが偏ることになって軍が崩壊することは容易に想定される。当時はGPS(衛星による測位システム)もあるわけもなく、紙の地図のうえで「フォックス・グリーン海岸」とか「イージー・レッド海岸」やあるいは「オマハ・ビーチ」などという現地の地名とは異なる作戦用のコード・ネームがつけられた多くの兵にとっては初めて訪れる未知の長大な海岸の一角が割り振られるのだから、自分が乗っている上陸用舟艇が進んでいる前方の海岸がどの海岸なのか、割り振られたコード・ネームの海岸なのかを確認するのもにも実は大きな混乱が生じうるのは想像に難くない。ヘミングウェイの署名報道記事によ

れば、各艇がもっているホチキスでつなげた紙の地図は偶然に海水の波を被って濡れて破れるは、破れた地図が偶然の海風に吹き飛ばされて海の藻屑となるは、上陸地点が分からなくなるは、自分の舟艇がこのまま進んでいいのかを確認しようと司令艇を探しても数千の艇が密集して荒波を進むなかで容易に見つからず、見つかったも荒波の中で司令艇の方へ舵を簡単に回せるほど小回りが利くようには舟艇は作られていない。ヘミングウェイは地図の予備は持ってこなかったのか！と怒鳴って絶句する。戦場は偶然性に満ちている。そもそも舟艇同士の連絡に無線もないのか、メガホンを使っている。メガホンを忘れた舟艇はそのかわりに口の周りに両手を丸く囲って大声で怒鳴り合って位置を確認し合おうとするのだが、少し離れた艇には声が届かない。これをドイツ軍があらかじめ時間をかけて機雷を配備したであろう海岸で行うのだが、それを除去したはずの自軍の掃海艇を偶然見失うと掃海済みの航路とそうでない海岸との区別がつかなくなる。戦場は偶然性に満ちた海である。

—「しかし君たち読者が1944年6月6日のDデーに我が方がフォックス・グリーン・ビーチとイージー・レッド・ビーチを奪ったときのLCV(P)で起きた様子を知りたいのなら、これが私なりにできるだけ現場に迫ったものである」というヘミングウェイの署名記事の信憑性をどう測るかは確かに容易ではない<sup>48</sup>。今日の百科事典にある「一部を除いて円滑に進み」という記述と上陸兵士たちの大混乱を報じた署名記事との間の奈辺に真実があるかを洞察することは容易ではない。戦場にある偶然性を主題的に解明しようという試みがこれまであまりなされてこなかったように思われるのも、この困難さによるのかもしれない。当事者の証言だからといって、信憑性は完全ではないらしい。とうのも、多くの戦場の前線を見てきたヘミングウェイも、「私がそれまで知っていた戦争では、自分が負傷した様子について人はしばしば嘘をついたものだ。始めはそうでもないが、後では嘘をつく。私のときも私だって少しは嘘をついた」と率直に書いている<sup>49</sup>。たいていの場合それは、授与される勲章の等級を少しばかり上げるためであるか、戦線から離脱する理由付けを補強して憲兵による即決処刑を免れるためである<sup>50</sup>。既にここに戦場における偶然性の別的一端を垣間見ることができる。

## 9. 二人のノーベル文学賞受賞者のノルマンディー上陸作戦報告と戦場の偶然性

さて「史上最大の作戦」の後方の一番の最後方の司令塔には、イギリスのチャーチルとソ連のスターリンがいた。この二人の間にどのような電報が交わされたかを、チャーチル自身が回顧録『第二次世界大戦』に次のように引用している。

1944年6月6日、Dデーの午後になる前に、チャーチルはスターリンに電報を打っている。  
—「すべては順調に始まりました。機雷、障害物、砲台はほとんど制覇しました。空挺作戦は成功裡に、かつ大規模に進みました。歩兵部隊の上陸は急速に進行中であり、多くの戦車と自動推進砲は既に揚陸しました。気象の予想は、穏やかに回復へと向かっています」<sup>51</sup>—。

これに続けてスターリンからの返事も引用されている。—『大君主(Overlord)』作戦の緒戦の成功についての貴下のご連絡を受領いたしました。それはわれわれ全員に喜びを与え、今後更なる成功への希望を与えるものであります。テヘラン会談における合意で組織されたソ連軍の夏季攻撃は、六月中旬には、前線の重要セクターの一つで開始されるでしょう…(後略)…」<sup>52</sup>—。

これへのチャーチルの補足の再返信電文は以下の通り。—「私は本日（6月7日）正午までの状況に非常に満足しています。ただ米軍のビーチ上陸の一地点に深刻な困難が生じましたが、今ではそれも片付きました。…（中略）…我々は小さな損害で海峡を渡りました。我々は約1万名の兵力を失うと予想していましたが…」<sup>53</sup>—。

チャーチルはこれらの文筆活動によって1953年にノーベル文学賞を受賞している。ヘミングウェイがノーベル文学賞を受賞したのは、その翌年の1954年であった。しかし、この二人の受賞者の史上最大の作戦の上陸に関する叙述の違いはあまりにも大きい。チャーチルは最後方の安全な最高司令室にいてスターリンに電報を送っている。ヘミングウェイは、兵士ではないにしても最前線の海上艦まで従軍して報告している。

そしてチャーチルがスターリンに打電したときには解決済みとして説明した「米軍のビーチ上陸の一地点」に生じた「深刻な困難」とは何か？この米軍の上陸作戦で最大の困難と言えば、「伝説」となった米軍部隊「全滅」の「オマハ・ビーチ」の上陸作戦を誰もが思い浮かべる。この「ビーチ」の上陸作戦を担当したのは、アメリカ陸軍「第一歩兵師団」と「第二九歩兵師団」であった<sup>54</sup>。

この二個師団を含むアメリカ「第五軍団」を率いるのは、レナード・ジェロワ將軍だった<sup>55</sup>。大部隊を率いての実験経験がないジェロワ將軍が軍団長に選ばれたのは、アイゼンハワー最高司令官と偶然に個人的に親しかったからと感じていた「第一軍」司令官のブラッドリーは、同様の上陸作戦の経験のあるクラレンス・R・ヒュブナー少将に現場の指揮を託した。そしてその指揮下に、自分が師団長をつとめる「第一歩兵師団」だけでなく、「第二九歩兵師団」所属の第一一六歩兵連隊も任せられたのである。個人的な人脈による指揮の偶然性を回避しようとした配慮の結果、偶然にも通常は自分の指揮下になくその内情をよく知らない連隊の指揮を任せられるという指揮系統の偶然的事態が生じたのである。

その第二九師団「第一一六歩兵連隊」A中隊に所属した計215名の兵士のうち100名前後が戦死、負傷者も多数であった<sup>56</sup>。こうして「オマハ・ビーチ」は、「アメリカの伝説」となった<sup>57</sup>。

この上陸作戦に関する代表的な戦記は、公戦史に関わった2001年の文献を引用しながら、次のようにまとめている。—「のちにアメリカ陸軍の公戦史を執筆するフォレスト・C・ポグ博士は、生存者の聞き取り調査をおこなったあと、次のように書いている。彼らは『自分以外のものはみな殺されるか、捕虜になったと思いこんでいた。戦争につきものの“フォグ・オブ・ウォー（不確定性）”が犠牲者の推計値をかくも大仰なものにした要因であるけれど、それでも最悪の推計値ですら、Dデイ前に最高司令部が恐れていた事前推計値を相当に下回っていたのである』と。唯一確実なのは、侵攻作戦の最初の24時間に、フランスの民間人が3000人殺されたという事実である。この数字は、アメリカ軍全体の戦死者数の2倍に相当した」<sup>58</sup>。そしてこのような数値は、当時のアメリカ軍に従軍して戦争報道に携わっていた当時のヘミングウェイにも分からなかったことであり、実は現代の代表的なこの戦史においても未確定な推定値が残されていることが判明する。

つまりこれほどまでも、戦場には不確定要素つまり偶然的な兵士と民間人の死傷が満ちている。すなわち、—「現実の戦争は決して紙上演習のようにはいかないし、戦記を読んでも実際の戦闘の様子はわからない」のは<sup>59</sup>、多くはこの戦場の偶然性によるものであり、だからこの偶然

性はいわばクラウゼヴィッツの言う「戦場の霧(Nebel des Krieges)」であり、それゆえにこの偶然性を研究対象とすることは雲ならぬ「霧」を掴むようなことなので、そのような戦場の偶然性に関する愚かな研究は誰もしようとしなかったものと思われる<sup>60</sup>。あとはこの偶然性を数学的・統計的モデルで処理しようとするればオペレーションズ・リサーチの登場になる。これは軍事上の作戦効率を上げるための数学的工夫であって、戦争を回避するために事前に機能していれば手間が省けるような効率性である。

戦場の偶然性の結果、後方ほど前線の被害を過小評価しようとし、前線ほど過大評価しようとするのかもしれない。戦場の真実は、各方面の情報が残され証言が集められ検証されたはずのこれほど有名な「史上最大の作戦」ですら、さまざまな偶然性の「霧」の彼方に今なおある。

このこと自体、戦場の偶然性の因果系列の連鎖の結果としての戦争評価の不確実性ないし偶然性として銘記されてよい。

## 10. おわりに—戦場の偶然性に照準した近景からの鳥類学的平和哲学—

空であれ<sup>61</sup>、陸であれ、海であれ、あるいは史上最大の上陸作戦であれ、最前線の兵士の死に照準する限りで、「近代戦に勝者はない」という結論に至り、その限りで決して戦争に加担するなという限定的な平和哲学を、ヘミングウェイは繰り返し 1930 年代に発表していた。しかし市街戦の最前線には、兵士だけでなく、実は市民の老若男女の全てがいて偶然に戦禍に巻き込まれる。このコラテラル・ダメージ（市民の偶然的付随的死亡）をヘミングウェイの署名記事は、窓からの遠景と目の前の凄惨な近景を往復しながら具体的に伝えていた。

それは、たとえば侵略戦争と自衛戦争等も区別なく、無規定に戦争一般を全否定する無限定な平和哲学ではなかった。その証拠に、第二次世界大戦の西部戦線のパリ解放戦に従軍したヘミングウェイの「部隊」がとうとうパリ解放の前線に到達して、かつての文学修行時代の二十歳台に空腹で通ったパリのシェークスピア書店をナチスから「解放」しに向かう時には、ヘミングウェイは高揚感を隠さなかった。そのとき眼下のパリを見てこみ上げるものがあって、双眼鏡を拭かなければならなかったほどであった<sup>62</sup>。彼の哲学は、決して中立客観的な平和哲学ではなかった。彼が誰の味方であったのかは、繰り返すまでもない。

しかし戦場の最前線における闘う兵士の死の偶然性に視準して「近代戦に勝者はない」ゆえに戦争に加担すべきではないという限定性を持った 1930 年代のヘミングウェイの反戦平和哲学は、今日の「核戦争に勝者はない」という反核戦争の平和哲学とは異なり<sup>63</sup>、以上のような独自の軍事的分析にもとづく限定性をもった闘う兵士の独自の限定的平和哲学であった。それはハゲタカが負傷者を狙うアフリカの戦場の個性に対応して、負傷した兵士はすぐに腹ばいになるように鳥類学的な視点から助言するとともに、兵士の食事回数と食事内容の現実的違いを考慮した上で兵站線の維持にかかるコストと労力を冷徹に計算するプラグマティックな軍事的計算の算盤を弾いたうえで兵士の飢えと軍の崩壊を予測した冷徹な軍事分析が並行する限定的な現実的平和哲学であった。この独創性を強調して、それは具体的な戦場の偶然性を直視した「鳥類学的」平和哲学と呼ぶこともできる。

それは現代日本の戦争を限定しないで一般的に全否定する平和論とは様相を異にするだけでな

く、世界的に見ても独自の個性的な分析と論点をもったオリジナルな平和哲学であり、この限定的な平和論の独創性は、その独自性のゆえに、おそらくまだあまり理解されていない平和哲学である<sup>64</sup>。それは20世紀ハードボイルドの源流として、のちに独自のコードによって行動する米国ハリウッド映画のダークヒーロー達の米国的文化の流れに掉さず文化的独創性であるが<sup>65</sup>、この独自文化の潮流を理解するためには、その独自の平和哲学の理解を拡張するために、前線に従軍することによって戦場の偶然性を具体的に剔抉したヘミングウェイの戦争報道記事だけでなく、その戦争文学の分析へと展開しなければならないが、それはまた別のオペレーションと分析を要する。

(註)

<sup>1</sup> とはいえ今日の新聞報道記事から、以下のような裏付けを得ることはできる。2023年7月6日未明、ウクライナ西部リビウ、ユーラ・トロブチェンさん(19)はヒューツという「誰かが大きな口笛を吹くような」音を聞いたという。自宅から3ブロック離れた先にミサイル攻撃があり、10人が死亡した。「死んでいたのは、私だったかもしれない」と声を絞り出し、少し「ミサイルがずれていたら。生死は紙一重だと実感した」という(朝日新聞「いま戦わなければ、平和は訪れない」2023年08月01日朝刊1外報11面)。

<sup>2</sup> NHK国際ニュースナビ「ロシアと戦う女性兵士「塹壕で地獄を見た」それでも戦場に立つ」2023年10月6日 [https://www3.nhk.or.jp/news/special/international\\_news\\_navi/articles/feature/2023/10/06/34950.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/feature/2023/10/06/34950.html) 2023年10月7日閲覧。

<sup>3</sup> 拙稿「ヘーゲルの偶然性の社会哲学—21世紀ポスト分析哲学のフロンティアとAI(人工知能)の未来—」富山第一銀行奨学財団『助成研究報告書2022』、2022年。

<sup>4</sup> 1917年4月、第一次世界大戦に米国が参戦、ヴァレリーは、10月に詩「曙光」を発表、同月末から翌月にかけて「海辺の墓地」の原稿を書き、やがて「風立ちぬ、生きねばならない」と記す。その詩の中で「永遠の素因」からの「風」と「浪」よ、「時間の寺院」を「打ち砕け」と祈ったが、1918年1月21日、空襲で隣家に爆弾が落下し、3月にドイツ軍の長距離砲ベルダによるパリ砲撃が激化すると、4月に家族はサルト県に疎開、6月にはルベールとともにパリを脱出、マンシュに赴き9月にブルターニュの家族のもとに行き、10月帰京、11月休戦条約成立。1920年8月『海辺の墓地』初版刊行(P.ヴァレリー『ヴァレリー詩集』鈴木信太郎訳、岩波文庫、1968年、394頁)。「風立ちぬ」、だからそれでも戦争の偶然的惨禍のなかを「生きねばならない」。戦争の偶然性の偶然的惨禍を生き延びる中でヴァレリーの詩は「時間の寺院」を永遠の「浪」が破壊して進むことを願ったのである。この頃ドイツ兵として敗戦を迎えたA.ヒットラーは何を願っただろうか。そこにはどのような異同があったのか。丸山眞男が指摘した高村光太郎だけではないかもしれないし、日本の思想の側面以外に日本人だけではない側面もあるのかもしれない。戦争の偶然性に目を向ける戦争の平和哲学においては、この偶然性の哲学的領域を新しく研究領域にすることが可能になる。それはたとえば「オランダのゾイデル海干拓のような文化事業」(S.フロイト『精神分析入門(続)』31講)のようなものなのです。

<sup>5</sup> 朝日新聞「無人機、アパート攻撃 ウクライナの3人死亡 ロシア」2023年07月05日朝刊1外報5面。

<sup>6</sup> 朝日新聞「戦禍の叫びを訊いて ウクライナ撮り続け伝える、玉本さん」2023年07月16日朝刊淡路・1地方21面。この記事の写真の説明には、「戦死した父の写真を手にする少女。『私は泣かない。お母さんを悲しませてしまうから』と語ったという」とある。なお、スペイン内戦の激戦地であったカサ・デ・カンポの戦場で自軍の仲間の兵士の遺体の収容中に死んでいく別の兵士を遠くから双眼鏡で見ていたマーサ・ゲルホーンと思われるアメリカ人ジャーナリストのヘミングウェイの描写—それはハードボイルドスタイルの生成と構造にとって重要な示唆を与える古典であるが—については、ヘミングウェイ「人影の遠景」参照。このタイトルは、戦場で死んでいく兵士の人影を撮影するには遠景である必要性をめぐる戦場のトラウマ(偶然的な心的外傷)をめぐる戦場映画撮影の事情とハードボイルドスタイルの生成と構造が無縁ではないし、それが大都市の中に入り込んだ地上戦がもたらすトラウマの情景であることを示唆している。

<sup>7</sup> このこととは別に、20世紀以降の戦争においては、兵士の戦死者数よりも民間人の戦災者数の方が遥かに多くなったことが常態化して久しい。この背景に戦争の総力戦化と大量破壊兵器の開発という戦史上の構造変化があるが、この点については別の機会を要する。

<sup>8</sup> ヘミングウェイ24歳のときに週刊紙に掲載された次の署名記事を参照。E.Hemingway, War Medals for Sale, *The Toronto Star Weekly*, December 8, 1923; E. Hemingway, *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, Selected Articles and Dispatches of Four Decades, ed.by W. White, Scribner, 1967→2003. pp.120-123.

<sup>9</sup> 「戦闘の実相(the shape of the battle)」については、E. Hemingway, "Night Before Battle" *Esquire*, February, 1939, p.27, Reprinted from the Esquire Archive, <https://classic.esquire.com/article/19390201030/print>, E.

Hemingway, "Night Before Battle" *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, New York : Scribner's, 1987. p.438.

<sup>10</sup> そもそもヘミングウェイの戦争報道に着目する研究は、あまり見られない。一例として日本ヘミングウェイ協会が編集した『ヘミングウェイを横断する』という研究書の巻末にある「ヘミングウェイ書誌—研究書ほか」を見ても、スペインの闘牛に関心を集中したものを別にすればノン・フィクション・ライターとしてのヘミングウェイへの関心は薄く、ましてやヘミングウェイの戦争報道に関する署名記事報道に関する研究は見られなかった。日本ヘミングウェイ編『ヘミングウェイを横断する—テキストの変貌』本の友社、1999年、参照。また、「巻末資料 日本におけるヘミングウェイ研究書誌—1999年～2010年」(日本ヘミングウェイ協会編『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』臨川書店、2011年)、参照。これらの重要資料から窺えるように、ヘミングウェイの文学に研究の関心が集中しているのは、言うまでもない。

<sup>11</sup> なお2022年、先進国等においてはウクライナ情勢で近年にわかに戦争に関心が集まったが、パレスチナやモスルやシリアをはじめとした中東に限らず、チェチェン、ジョージア、ミャンマー、スーダン等々、絶え間ないほど戦争が続いてきたことを忘れるわけにはいかない。この点について、後に取り上げるようにヘミングウェイの約百年前からの戦争報道において既に、「欧州は絶えまなく戦争を続けてきた」と指摘されていたことを見れば、今日の戦争のグローバルな展開は、この約百年以上前からのヨーロッパの絶えまない戦争のグローバル化に外ならないという視点も可能になる。なお、上記等々の戦争の具体的状況に関する報道が少ないのに比べれば、ウクライナ情勢ではにわかに戦争に関心が高まり具体的な戦争状況が一定程度報道されるようになったので、約百年前のヘミングウェイ等の記事報道と比較して論じることが可能になったが、上記等々の戦争では報道そのものが少なく比較する材料すら欠乏する状況で、比較研究もできなかったという実態がある。このこと自体ないし差別の問題は、平和哲学自体の研究にとって、別途検討を要するはずである。

<sup>12</sup> 偶然的惨禍に巻き込まれて長期に渡る人は、やがて関心が失われ忘れ去られることを恐れるようになる。

一例としてウクライナ人の人気歌手ジェリー・ヘイルは2022年2月24日当時26歳で「陽気で自意識過剰な歌」を唄い、ベッドで別の女性の名を呼んだ男に対する「あんたはキャンセル」でヒット曲を飛ばしていたというが、その後はヨーロッパでのコンサートの売り上げは戦費のために祖国に送り、人々がウクライナへの関心を失わないように努力しているという(「世界の関心が失われないように…」ウクライナ人歌手もコメディアンも戦い続ける」ニューズウィーク日本版2023年6月1日(木)19時00分

[https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2023/06/post-101786\\_2.php](https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2023/06/post-101786_2.php) 2023年9月14日閲覧)。

しかし世界の関心がウクライナに向けられる中、UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)のフィリップ・ラザリーニ事務局長は2023年10月2日のインタビューで、「パレスチナ難民の多くが国際社会から見捨てられたと感じていて、苦しみや絶望感が広がっている」と述べ、難民への継続的な支援を呼びかけると(「“パレスチナ難民 世界から見捨てられている” 国連機関が訴え」NHKNewsWeb 2023年10月3日7時56分

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20231003/k10014213561000.html> 2023年10月7日閲覧)、10月7日早朝、パレスチナ自治区のガザ地区を実効支配するイスラム武装組織ハマスが、イスラエルに向けて自棄的とも思われる絶望的な大規模攻撃を開始し、前例のないような報復と悲劇がこの地区で危惧されるようになったが、その絶望的自棄的攻撃の目的は中東への関心を回復することであったと専門家によって解説されている(「イスラエルにイスラム組織「ハマス」が大規模攻撃 何が起きた?」NHK国際ニュースナビ 2023年10月10日

[https://www3.nhk.or.jp/news/special/international\\_news\\_navi/articles/qa/2023/10/10/35010.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/qa/2023/10/10/35010.html) 2023年10月10日閲覧)。無関心が戦争にとって、また当事者にとって、どのような意味をもつか、立ち止まって考える時である。関心の偶然性は、戦争の偶然性を誘発する偶然性を生じさせるかもしれないのである。関心の偶然性と戦争の偶然性を人生と実存の不条理性へと還元しては知性も身も蓋もなくなる。

フロイトが取り組んだ戦争神経症の偶然性の問題について、2023年のウクライナの負傷兵士のそれについて、「カウンセラーはイワネンコさんに「あなたは今、喪失に次ぐ喪失を経験しています。市民が暮らす環境に身を置くことが、そのつらさを、少しずつ和らげる機会になると思います」と、今は穏やかな環境に身を置いた方がいいのではないかと助言した。しかしそれが実現したとしても、そうとは限らなかった。日常生活が戻ったかに見える首都キーウに帰って友人と偶然に入った飲食店で客と店員が些細な事で言い争っているのを見て、「自分たち兵士は、こんな人たちを守るために前線で命をかけているわけではない」という感情が湧いてきて、「キーウは、もう自分がいるべき街ではない。戦場の仲間のもとに戻りたい」と思うようになったという。つまり、そんな「キーウの「日常」に抱いた落胆に似た感情。そして、命の危険をかえりみず前線で戦う仲間たちの存在が、彼女を戦場へと駆り立てているように思えた」(NHK国際ニュースナビ「ロシアと戦う女性兵士「塹壕で地獄を見た」それでも戦場に立つ」2023年10月6日

[https://www3.nhk.or.jp/news/special/international\\_news\\_navi/articles/feature/2023/10/06/34950.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/international_news_navi/articles/feature/2023/10/06/34950.html) 2023年10月7日閲覧)と伝えられている—「私は前線の塹壕の中で、あらゆる残酷なこと、そして、地獄を見ました」というのにもかかわらず—。この関心と無関心との偶然的な事象もしくは偶然的な交替が偶然的心的外傷にもたらす偶発的事態の問題は、ヘミングウェイ文学においては「蝶々と戦車」や「キリマンジャロの雪」などの小説や、そのハードボイルドスタイルに波及していくが、この問題自体の大きさは別稿を要する。またこの偶発性は、取材者や研究者にも降りかかり、さらに世界の戦争と平和との新たな偶発的分断と対立を細分化し更新していく。ヘミングウェイのバー三部作等はこの分断化からのサード・プレイス(=ポリス)の再生を模索する点で共和主義の新局面を模索するものでもあったが、この点についても別稿を要する。

さらに、ウクライナにせよ中東にせよ、いずれもヨーロッパの両周辺であり、その偶然的惨禍はヨーロッパの周辺の鯨寄せと考えれば、さらに次註(13)のヘミングウェイの警鐘を参照すれば、それはもはや偶然的ではない局面も想定内となる。それは周縁的必然性の想定も可能になるが、これ自体にも戦争の偶然性をめぐって別稿を要する大きな問題がある。

<sup>13</sup> ヘミングウェイはアフリカのイ・エ戦争によるヨーロッパの利得を冷徹に分析しながら、『エスクワイア』誌1935年9月号にアメリカの(男性)読者に向けて次のように訴えていた。「アフリカにおけるこの戦争でヨーロッパの一時的な平和が長くなることもあるかもしれない。しかしヨーロッパで煮立てた地獄のスープを我々が飲む必要はない。ヨーロッパは絶え間なく戦争をしてきたし、そのインターバルの平和はただの休戦にすぎなかった。我々は一度、愚かにもヨーロッパの戦争に啜り込まれた(sucked)が、二度と再び啜られていけない」

(BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY, p.212. 『ヘミングウェイ全集』第2巻、中田耕治他訳、三笠書房、1974年、198頁。なお、訳文に関しては掲載の既刊邦訳に基本的によったが、原典対照の上、筆者の責任において訳し直したところもある、以下同様。) —。なおこの1935年9月の原文でヘミングウェイは、この「地獄のスープ」の味付けに「ヒットラーのまさか!(something)」があるかもしれないと予言していた。

<sup>14</sup> ヨーロッパのグローバルな「啜りしゃぶり(sucked)」については、前註(13)参照。

<sup>15</sup> BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY, p.259. 全集2巻、237頁。これがフィクションではないことを考慮すれば、ハードボイルド・スタイル(文体)の一方の極限と言っても言い過ぎではないかもしれない。

<sup>16</sup> 言うまでもないが2011年の東日本大震災のときと同様にインターネット上の動画資源を検索すれば今日のウクライナ戦線での悲惨な映像を発見することは可能かもしれないが、AI等々によって偽造されたものかどうかといったことを含めたその動画の信憑性をどう評価するかといったIT技術上の専門的な問題も現代では配慮しなければならない。しかしさらにそうした専門的な問題のほかに、その評価プロセスも含めてそうした悲惨な映像を見ることにともなう二次被害または二次災害のような研究者自身の健康問題も生じる。実のところ映像のない90年前のヘミングウェイによる署名記事の戦争報道記事を読むという研究作業ですら、二次被害または二次災害のようなメンタルな健康上の問題やストレスは、確かにこうした戦争研究を通じた平和研究が稀である理由の一端を示唆してくれるものとなった。戦場の現場に肉薄しようとした従軍記者ないし従軍作家であったヘミングウェイが強いストレスのもとで家族に八つ当たりをしながら、二次的な「戦争神経症」(フロイトの用語)から逃れようとしてアルコール中毒に接近していった歴史的文学的医学的必然性は、こうしたリスクに「暴露」される研究によってのみ身をもって理解できるようになる。その点で両親の影響や恋愛体験や宗教的背景の違い等々を配慮する必要は認められるにしても、広島への被爆体験に殉じた原民喜と6歳違いのヘミングウェイとの間に共通点を認めることもできる。「キリマンジャロの雪」や『海流の中の島々』のヘミングウェイ文学の主人公のように、このストレスの捌け口を家族や女性に求めることを回避しようとするれば、あとはアルコール類に逃避する事情の必然性は、ヘミングウェイの現代戦争の「実相」の探求を追跡し背後から先行部隊を掩護しようとする者だけが理解できる。ハードボイルドにアルコールが付き物であるのは、危険に身を晒す現場主義による探求が、安全な研究室での平和な研究とは異なる状況に晒されることの必然的結果であるが、こうしたことは苛酷現場に晒されなければ理解できない。しかしここにこそ、戦争と平和との間の紙一重の偶然性が発生する余地が生じ、この余地の研究こそがおそらく最も困難な研究である。

<sup>17</sup> BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY, p.259. 全集2巻、237頁。

<sup>18</sup> 朝日新聞「クラスター弾、3人死亡 ウクライナ東部、2人は子ども」2023年07月26日夕刊社会総合6面。なおお付言すれば、クラスター弾だけでなく核兵器の〔限定的〕使用も想定されている。

<sup>19</sup> 今村楯夫・島村法夫監修『ヘミングウェイ大事典』勉誠出版、2012年、384頁。

<sup>20</sup> BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY, p.259. 全集2巻、237頁。

<sup>21</sup> E. Hemingway, "Night Before Battle" *Esquire*, February, 1939, p.27, Reprinted from the Esquire Archive, <https://classic.esquire.com/article/19390201030/print>, E. Hemingway, "Night Before Battle" *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, New York: Scribner's, 1987, p.438. ヘミングウェイ『蝶々と戦車・何を見ても何かを思いだす—ヘミングウェイ全短編3—』高見浩訳、新潮文庫、1997年、160頁。

<sup>22</sup> 『ヘミングウェイ大事典』、383頁。

<sup>23</sup> 「北米新聞連盟」の「司令部」と前線の「現場」との間の情報の壁の問題であるが、これが軍の「司令部」と前線の「部隊」や現場の戦況との間の情報の壁の問題になると、「戦場の霧」というクラウゼウィッツの概念に該当することになる。これがE.M.レマルクの小説の表題「西部戦線異状なし」という司令部のアパシーであり、またロシアのウクライナ侵攻で前線の武器弾薬不足や悲惨な実情を知ったプリコジーンの2023年のロシア軍司令部への不満と反逆のアイロニーの原因となる。

<sup>24</sup> このヘミングウェイの戦争告発を凌駕する日本のノンフィクションの実例がある。鴻上尚史『不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか』(講談社現代新書、2017年)である。なぜヘミングウェイを凌駕しえたのかというと、おそらく日本軍の作戦の恣意性もしくは偶然性(この場合は、行き当たりばったり性と言っても可)が国際旅団もしくはスペイン政府軍やアメリカ政府軍の戦略の偶然性よりも遥かに桁違いに不合理だったからと考えられる。その桁違いの不合理性とは、もちろん昭和19年から始まった「特攻」作戦である。この司令の恣意性もしくは不合理な作戦の偶然性に対する「レジスタンス」が命令違反の「不死身の特攻」つまり9回特攻に出撃しながら爆弾を命中させて9回生還して終戦を迎えて天寿を全うした『不死身の特攻兵』の実在である(こうした司令の偶然性もしくは作戦戦略の偶然性を詳解する戦時研究が導いていくのは戦場における戦争の不合理性と偶

然性である。ここから逆照射されるのは、これまでの平和研究があまり研究してこなかった戦場からの平和的戦争研究の領域である)。

<sup>25</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.262. 全集 2 巻、239 頁。

<sup>26</sup> 朝日新聞「いま戦わなければ、平和は訪れない」2023 年 08 月 01 年朝刊 1 外報 11 面。

<sup>27</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.263. 全集 2 巻、240 頁。

<sup>28</sup> Ibid.

<sup>29</sup> Ibid.

<sup>30</sup> Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press, 1995. ハッキング『記憶を書きかえる』北沢格訳、早川書房、1998 年。拙稿「因果的決定論の科学史と近代心理学の成立— P. ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立—」、富山国際大学『人文社会学部紀要』VOL.3 (2003.3)。

<sup>31</sup> G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Werke in zwanzig Bänden. Theorie-Werkausgabe, Bd.3, Suhrkamp (Frankfurt a. M), 1971.

<sup>32</sup> Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press, 1995, p.188, ハッキング『記憶を書きかえる』北沢格訳、早川書房、1998 年、234 頁。拙稿「ルーピング・イフェクトと現象の創造—偶然性をめぐる心理学史における「ヘーゲル的伝統」—」富山国際大学、『子ども育成学部紀要』、第 4 巻 (2013. 3)、24 頁。

<sup>33</sup> Slavoj Žižek, *Welcome to the desert of the real! : five essays on September 11 and related dates*, Verso Books, 2002.

<sup>34</sup> 北日本新聞「南原繁 幻の短歌 14 首」2017 年 1 月 1 日付 社会 39 面。

<sup>35</sup> 1935(昭和 10)年 10 月 13 日消印の片口安太郎宛の南原繁書簡(2022 年 4 月 23 日、富山県射水市新湊博物館にて閲覧)。

<sup>36</sup> ヘミングウェイ「次の戦争への注解—シリアスな時事通信」(*BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.207f. 全集 2 巻、195 頁)

なお、ヘミングウェイの軍事専門家としての技量の評価については、当時の PM 紙の編集長であった R.インガーソルは次のように記している。—「彼の軍事専門家としての名声も、従軍記者としてのそれとは別個に言及するだけの価値がある。彼は戦争というものを全体的に捉えようとする研究者である。一機関銃の据付けから戦術、演習、民間の士気、産業の戦時構成に至るまで、戦争に関するあらゆること、彼はそれを二十年にわたって研究してきた」(*BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.304. 全集 2 巻、273 頁) —。この経歴は、実は幼児期における父親からの猟銃の扱い方と狩猟の指導、16 歳で禁猟のオオアオサギを誤射して狩猟監視官に追われて原野を逃亡したときのゲリラ戦のような経験にまで遡るときに、彼の兵学が野性的な原野において徹頭徹尾プラグマティックであることの理由がわかる。ほかに彼の軍事専門家としての評価については、前掲の『ヘミングウェイ大事典』、381 頁、参照。

<sup>37</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.209. 全集 2 巻、196 頁。ここで銘記されてよいのは、戦争に関するマルクス主義的な唯物論をヘミングウェイが明確に斥けているということである。このことはヘミングウェイのキューバ在住等を理由とする FBI との関係を考えるときに焦点を曖昧にしないためにも重要である。

<sup>38</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.209f. 全集 2 巻、197 頁、「エスクワイア」1935 年 1 月号。

愛国心のための殉死を甘美に幻想して自衛隊員を扇動しようとした三島由紀夫の文学的思想が、ヘミングウェイの戦争文学のそれとは真逆であることは、ここに明白である。

その傷病兵の近景からのクローズアップからの描写—ハードボイルドスタイルの一方の断面を形成する—については、ヘミングウェイ自身の第一次世界大戦のイタリア戦線での傷病兵搬送経験(談)とともに、「新しい種類の戦争」(NANA 通信 1937 年 4 月 14 日)のスペイン内戦での従軍取材体験の影響も注目される (*BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.209. 全集 2 巻、262 頁)。両者の違いには、こうした実体験の差も大きいと考えられる。

<sup>39</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.210. 全集 2 巻、197 頁。この「豚ども」という悪態は、小説「分水嶺の下」の最後の方にも出てくる。E. Hemingway, “Under the Ridge” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, New York : Scribner’s, 1987. p.469. 小説「戦いの前夜」の末尾と同様に、ヘミングウェイもまた「怒っていた」のは間違いない。

<sup>40</sup> *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.234. 全集 2 巻、216 頁。「売春婦(whores)」一般を指しているのではなく、戦時利得を得ようとする者に限定すれば、政治家も「売春婦」も「参謀将校」も同じということである。戦時利得と手を切つて戦争を憎むかぎり「将軍」も「売春婦」も「卓越した高潔な人物(excellent and generous people)」であるとヘミングウェイは明記している。ただしどのような職種であれ、こうした「高潔な人物は例外なのだ」とも明記している。

なお憎悪の感情が暴力と戦争への閾値を超える社会的な要因については、ヘイトクライム等を研究する犯罪学の M.ウィリアムズ『憎悪の科学—偏見が暴力が変わるとき—』中里京子訳、河出書房新社、2023 年、参照。この憎悪犯罪の問題は、憎悪感情を理性で抑圧したり人権という理性概念を掲げるだけでは容易ではない「異なるものへの脅威を察知する能力」つまり本能的能力の問題がある。これについてはカントの啓蒙哲学のように理性が善の能力で本能や感情などの「傾向性」は悪と断ずる解決法だけでは前途は長い。他のアプローチをも開拓し

て併用する可能性もある。この可能性については、鈴木謙介「偏見が暴力につながる条件」日本経済新聞 2023年5月20日読書30面、参照。この偏見には当然、職業や民族等々への偏見が含まれ、それが暴力や戦争へと発展しない方途を探すためには、カント的永久平和論を含めて多様・多元的なアプローチを必要とする。

41 このような司令官たちの代表例が、ヘミングウェイが受賞する前年にその大戦回顧録によってノーベル文学賞を受賞したウィンストン・チャーチルである。本稿第9節で言及するように第二次世界大戦当時、チャーチルは最後方の最高指令室にいた。それゆえに「史上最大の作戦」の「伝説」の「血まみれのオマハ(Bloody Omaha)」ビーチを間に挟んで、ヘミングウェイとチャーチルは好対照と言って良い。Cf. W. S. Churchill, *The Second World War and an Epilogue on the Years 1945 to 1957*, Cassel & Company Ltd. London, 1959, p.782. チャーチル『第二次世界大戦』(下)、河出書房新社、1972年、326頁。

42 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.211. 全集2巻、197頁。

43 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.211. 全集2巻、198頁。

44 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.311. 全集2巻、279頁。

45 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.235. 全集2巻、217頁。

46 この意味で、戦後日本のサブカルチャーで前線の兵士の生命と生存を重視した松本零士や宮崎駿らの戦争漫画のモチーフをヘミングウェイの戦争報道と戦争文学は先駆したという位置付けや評価も可能になる。そこには日米の国家の違いを超えた思想史の文脈の収斂を見出すこともできる。そこに、国家で敵味方を分別する愛国心とは異なるサードプレイスの新しい共和主義の萌芽を看取することもできる。

47 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.228. 全集2巻、211頁。

48 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.355. 全集2巻、311頁。ここでヘミングウェイが記したフォックス・グリーン海岸は軍記に記録されているように(A.ビーヴァー『ノルマンディー上陸作戦』(上)、白水社、2011年、171頁、186頁)、イージー・レッド海岸も記録されているように(同書、194頁)、まさに「血まみれの」オマハ・ビーチの海岸に割りふられたコード・ネームであった。

49 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.265. 全集2巻、241頁。

50 憲兵による離脱容疑者に対する即決処刑の様子については、後にヘミングウェイ『武器よさらば』の後半で描かれた。

51 W. S. Churchill, *The Second World War and an Epilogue on the Years 1945 to 1957*, Cassel & Company Ltd. London, 1959, p.783. W. S. チャーチル『第二次世界大戦』(下)、河出書房新社、1972年、326頁。

52 *ibid.*

53 *ibid.*

54 A.ビーヴァー、前掲同書、168頁。

55 A.ビーヴァー、前掲同書、169頁。

56 A.ビーヴァー、前掲同書、207頁。

57 A.ビーヴァー、前掲同書、208頁。

58 A.ビーヴァー、前掲同書、207頁。

59 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.355. 全集2巻、311頁。

60 この間の事情については、むしろこの分野の古典であるクラウゼヴィッツ『戦争論』(1832年)が先駆的に「戦場の霧(Nebel des Krieges)」(第1部第2篇第2章第24~25節)等において、理論化不可能な偶然性の大海について指摘している。Vgl. Carl von Clausewitz, *Vom Kriege: hinterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz*. 18. Aufl., vollständige Ausgabe im Urtext / mit völlig überarbeiteter und erweiterter historisch-kritischer Würdigung von Werner Hahlweg, Dümmlers Verlag. 1973, S.289. 他に、「不確実性という霧(Nebel einer Ungewißheit)」(同第1部第1篇第3章 a.a.O. S.233.)という表現を用いた上で、「戦争は偶然の領域である(Der Kriege ist das Gebiet der Zufalls.)」(a.a.O. S.234.)と明記しているが、そこでヘミングウェイのような反戦論が出てこないのは、クラウゼヴィッツが前線の兵士の眼差しで考えているのではないからである。ヘミングウェイの表現で言えば、職業軍人ないし「将校」の観点からのクラウゼヴィッツの戦争論では「鳥類学的」反戦論は生まれない。また同時に、このクラウゼヴィッツの戦争概念は、偶然性概念を安易に実存的な不条理性に抽象的に還元することの犠牲とコストを示唆している。むしろプラグマティックな領域での偶然性を捨象することの不毛さが、こうした浪漫主義的美学がもたらす別の空白領域につながる。

61 空戦については今回は取り上げなかったが、空域への従軍については、*BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.356f. 全集2巻、312頁以降、参照。空域においても、空軍兵士へのヘミングウェイの敬意は変わらない。この前線の兵士への敬意ゆえに、彼は戦争賛美に向かうのではなく、逆に戦争反対へと向かうという逆説がその独創的な平和哲学へと繋がる。この逆説は確かに分かりにくいかもしれないが、それが20世紀ハードボイルドのコード・ヒーローの逆説的な独自コードへと繋がっていく。戦場は偶然性に満ちるがゆえに、ハードボイルドは逆説に満ちる。そこにはまた、戦場の「近景」と「遠景」を結びつける逆説が、戦争の前線と後方を結びつけるときに平和への回路が、イタリア人の歩兵の兵卒に「誰が彼らの敵なのか—そしてなぜそうなのか—彼らにわかっただらいいと思うのだが」という『エスクワイア』1936年1月号の「翼はいつもアフリカの上—鳥類学的通信」というかたちで開削される。上記註(40)、*BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.235. 全集2巻、217頁、参照。

62 *BY-LINE: ERNEST HEMINGWAY*, p.383. 全集2巻、332頁。

63 本稿は平和哲学の単一性ではなく、その多元性ないし多様性に注目している。第二次世界大戦における日本に

対する米国の原爆投下は戦争を早く終結させて双方の犠牲を少なくするために「正当だった」と考える人の方がアメリカでは多数派であり、そうではないと考える R.ローティや J.ロールズのような哲学者は米国では長く少数派であった。しかし 2023 年 7 月に「原爆の父」として知られる米物理学者 R. オッペンハイマーを映画化した「オッペンハイマー」が公開され、同時期に公開された米映画「バービー」の公式アカウントがバービーと原爆のキノコ雲を絡めた画像に好意的に反応すると、日本からは大きな異論が生まれた。こういう中でネバダ州ラスベガスの核実験博物館を訪れる米国人が増える中で、その中には「学校では、原爆は長引く戦争を終わらせた武器だと学んだ。でも本当にその理解でいいのか悩んでいる」という感想を漏らす米国人が若い世代では出てきている（日本経済新聞「米で原爆に関心高まる 正当化の世論、変化の兆し」2023 年、8 月 17 日、国際 11 面、参照）一。こうした状況下だからこそ、戦争をめぐる平和哲学の多様な展開と相互対話の重要性と可能性がますます増大している。

このようなクロニクルの変化の中で、マーサ・ゲルホーンの「優しい気持ち」を思いやって近景のクローズアップと遠景のロングショットをセザンヌの絵画のように往復する、セザンヌ主義的ハードボイルド・スタイル(文体)を通じた、原爆をめぐる日米の対立または違いの枠を超えた新しい共和主義的卓越主義の可能性を、ヘミングウェイの短編小説は示唆しているが、このセザンヌ主義的ハードボイルド・スタイルの問題については、別稿を要する。Cf. E. Hemingway, “Landscape with Figures” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*, New York : Scribner’s, 1987. p.596.

<sup>64</sup> だからヘミングウェイの平和哲学と言っても、それはその戦争哲学と表裏の関係と論ずることも可能である。戦争論と平和論というこうした問題文脈については、二村まどか「戦争学と平和学」(日本平和学会編『平和学事典』丸善出版、2023 年) 645 頁、参照。

<sup>65</sup> 2023 年のウクライナ情勢において、そのように武器弾薬と兵士の食糧の兵站(補給)を冷徹に計算する観点から正規軍とその正規軍の後方にいる司令部とに対して反旗を翻すようなダークヒーローとして現代のロシアの若者の人気を集めた例は、残念ながらもろちん傭兵会社ワグネルの E.プリゴジンである。プリゴジンは前線の傭兵への武器弾薬の兵站を怠ったとロシア正規軍を非難した。ロシアにおいては、ダークヒーローの末路は周知の通りであった。米国においてはどうか、結論は出ていない。というより、結論を出すのはどこの国でも躊躇される。ヘミングウェイの場合も、結論はおそらくまだ隠されている。しかしヘミングウェイ自身がそれを予見した作品が「分水嶺の下」であるが、やはりまだカムフラージュされている。